

K男の自信を高め、積極的に学習に取り組ませるための指導

—— 作業学習・行事の指導を通して ——

松本享典・八木啓子

生徒名H・K 高等部1年(16歳・男) 中学校(特殊学級)卒業 IQ…35(WISC-R)

1 実態と個人目標の設定

K男は、入学選考の時の面接や諸検査の時も、積極的な入学への意志を表明するところもなく、どちらかと言えば、投げやりの受験態度であった。反面、保護者の態度は積極的であり、絶えずK男に指示を与え、試問に対する答をうながそうとする様子が目立った。K男の消極的な応答の中にも、問いかけや設問に対するかなりの理解力が感じられ、特に、運動能力や巧み性を身につけていることがうかがえた。しかし、彼の性格に、彼の生育環境がかなり影を投げかけていることもうかがえた。

(1) 入学前の実態

K男は中学校に入学後7ヶ月後に転校し、特殊学級に入級して卒業をした。この間、両親の不和から父との別居、離婚、転居と不安定な家庭生活を経験するとともに、母親の過干渉ともいえる言動が増して、彼の自主性や独立心の育成が大きく抑制されてきた。また、特殊学級の生活では、かなり適応して、のびのびと学習していたようであるが、3年生になってからは、学級や学校に対する不信感に落ち入り、授業にも出ないで友人と学校のまわりで遊んでいるといった状況であった。就職を志望して、ある事業所を受験したが不採用となり、他の就職も現段階では不可能ということから、中学校の指導により、本人・母とも止むなく本校高等部を受験することにしたのが実情のようである。

(2) 諸検査と観察にみる実態

知能検査(WISC-R) IQ…35(MA5才2ヶ月) (S58年9月実施)

S-M社会生活能力検査 SQ…94(SA14才10ヶ月以上) (S59年4月実施)

入学して約1ヶ月後に、観察結果をもとにS-M社会生活能力検査を実施したところ、知能検査の結果に比べて、生活能力はかなり高いものを身につけているが、物事への取り組みが消極的であるとともに、気持ちを集中して根気強く取り組めないこと、意志表示がはっきりせず、新しい級友になじんだり集団活動の中に進んで入っていく姿勢が大きく欠けていることが分かった。

感覚・運動障害はないが、体格は小柄で、握力や肺活量が低い。偏食が目立つ。反面、かなりの機敏さを持っており、手先も器用である。

言語・数量に関する知識・技能も、1年生の中では高い方であるが、表現力や生活の中で生かす力が弱い。

(3) 個人目標の設定

上記の実態が示す通り、K男はかなりの理解力とともに知識・技能・態度も身につけているが、それらが断片的でありアンバランスである。これは、学習や生活の場で自分の能力を有効に生かす経験が乏しいために、何事にも自信ややる気が持てず、消極的で投げやりな態度として現れていると考えられる。

K男の3年後の社会参加の姿に職業的自立の可能性を大きくみることができる。この可能性へ向かっての現段階の課題は、高等部での学習活動と集団活動に適応させる指導の手だてを加え、教師や友だちから認められることから「自分はやればできるんだ。」という自信を回復させることである。と、とらえた。そこで我々は、K男の個人目標を次の様に設定して、指導を重ねることにした。

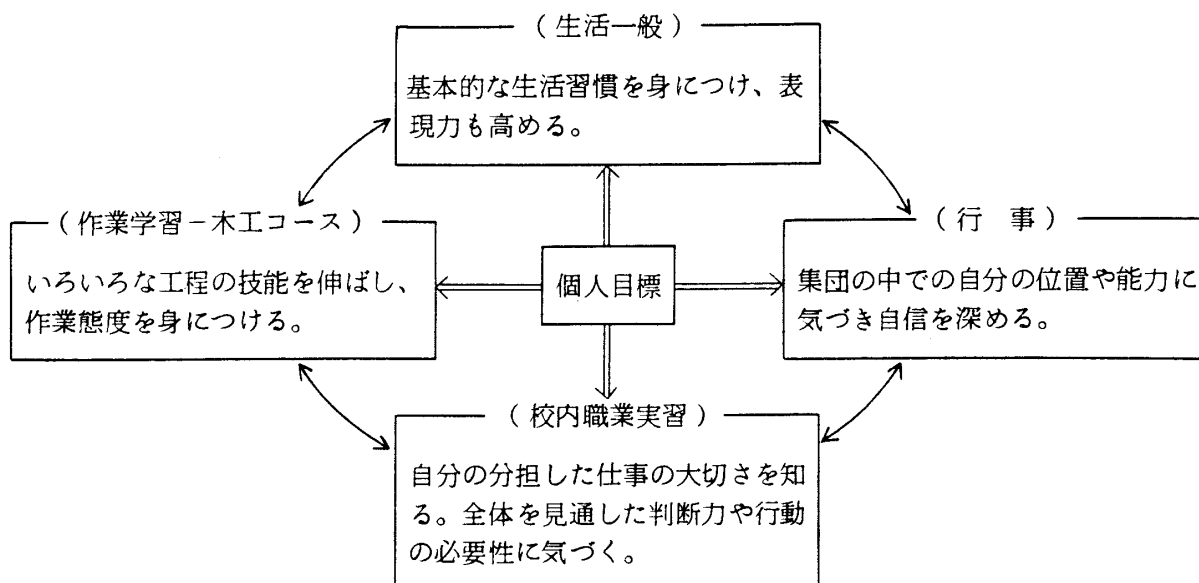
『学習したこと、経験したことを生かし、物事に自信を持って、積極的に取り組む』

さらに、この個人目標を達成させるために、K男の実態から次の具体目標を設け、指導の方針や指導の場を考えることにした。

- ① 自分には出来ることがいろいろとあり、出来ないと思うことも自分の努力によって出来るようになることに気づく。
- ② 集団の中で活動することが、自分にとってもまわりの人たちにとっても大切であることに気づく。
- ③ いろいろなことに自分から進んで取り組もうと努力する。

これらの具体的な指導の手だてとしては、K男の現在達成されている課題に気づかせながら、次のやや高い課題に自分なりに取り組ませ最後までやり遂げさせるとともに、集団の中での活動、特に、高等部全体の中での活動の機会を多く与えて、適切な評価をして自信を高めさせることが重要である。これらの指導は学校生活全般を通してなされるものであるが、特に、作業学習・校内職業実習・行事を中心に指導していくことにした。

◎個人目標と各領域のかかわり



2 作業学習と校内職業実習における指導

(1) 作業学習（木工コース）を通して

K男は、手先が器用であるが、作業の経験が少ないことから考えて、木工コースでの作業を経験させることにした。木工コースは、彫刻による花びんしき・壁かけの製作に取り組んでいる。この製作工程は「けがき」「切り」「彫刻」「ペーパーがけ」「との粉ぬり」「ラッカー仕上げ」と多様な技能要素を含んでおり、特に目と手の協応や巧み性が要求される。

K男の木工コースでの具体的な指導項目を①てぎわよさ（安全・正確・能率）をより高める。②きまりよさ（的確な言動）を身につける。の2つに置くことにした。

◎てぎわよさの意識づけの方法として

- ・作業の全工程を経験させ、作業の見通しを持たせる。
- ・電動彫刻刀など、機器を積極的に使用させながら、安全性への配慮の必要性に気づかせる。

◎きまりよさの意識づけの方法として

- ・返事、質問、報告の仕方を作業の流れの中で具体的な「ことば」「話し方」によって指導する。
- ・自分から報告したり、指示を仰がねばならない場面を意図的に作る。
- ・材料や道具の準備から後始末、掃除まですべて作業内容として取り組ませる。

1～2学期の間、上記のような手だてを加えながら指導してきた。その結果はつぎのようである。

- 電動糸のこ盤によって、直線・曲線とも正確に切れるようになった。
- 彫刻刀を両手の力のバランスをとって安全かつ上手に使えるようになった。
- 見通しを持って作業を進めることがかなり出来だした。
- サンドペーパーでみがき続けるといった単純な作業にも根気強さが見えてきた。
- 指示に対する「はい」という返事、わからないことがあると自分から尋ねること、作業終了の報告などが適切にできるようになった。
- 掃除などでも細かい所まで目配りをして、処理をしようとした。

このように、K男は、てぎわよさときまりよさの面において、かなりの変容をみたとと言える。

(2) 校内職業実習を通して

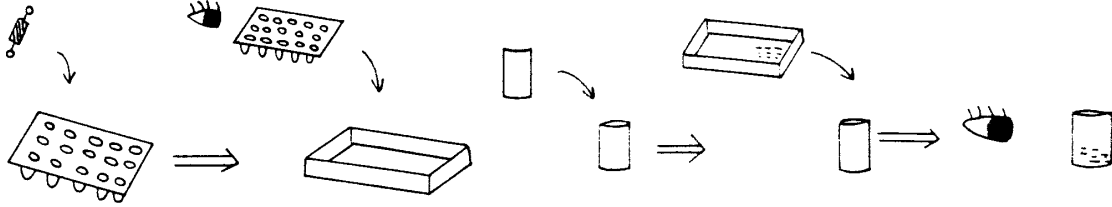
① 第一回校内職業実習（1・2年）（5月中旬・8日間）

作業内容はつり具（より戻し）の袋づめで、図に示す工程を設け、各工程を数名ずつ分担させるという流れ作業方式で行ったが、実態を見て担当する工程や方法を変えることもあった。そして、各作業工程での基本的なやり方のみを指導して、できるだけ各個人が自分なりに取り組むようにさせ、その実態を見ながら、その都度指導するようにした。

K男の具体的な指導項目を責任感（自覚・確実）、おもいやり（協調性）に定めて指導した。

(作業工程)

- ①より戻しをパックの全部の穴に入れる。 ②不良品と過不足をチェックし、箱にうつす。 ③袋に商品表示の紙片を入れる。 ④②の箱から袋へうつす。 ⑤不良品、個数などの最終チェックをする。



(実態1) K男は工程②を担当

- ・チェックをしないことが多く、チェックをしてもチェックもれがある。
- ・工程①が遅れて作業が滞っても催促しないで手を休めようとする。

<指導の手だて1>

- ミスがあると、その商品を買う人にも売る会社にも迷惑がかかることを自覚させる。作業グループを三つにわけ、班長に指名し工程④、⑤を同時に行うようにさせる。



工程②を担当するK男
「変なのないかなァ」

(実態2)

- ・必ずチェックをするようになり、ミスが少なくなる。
- ・作業が滞ると「早くして下さい。」と徐々に言えるようになる。
- ・K男の班は1日400～600袋位仕上げるようになる。

<指導の手だて2>

- 班ごとに合格数・不合格数を表にして競わせる。K男の班は工程③が遅れがちで作業量が増えないことを、どのように解決したらよいか自分で考えるように指示する。

(実態3)

- ・正確なチェックができた。
- ・工程③を家で仕上げてくるようになる。(1日100袋程度、3日間)
- ・班員への声かけも徐々に増えている。
- ・仕上げの数が班で1日900袋位に増え、不合格数も減る。

このように、不良品や個数のチェックも速く、確実に行えるようになり、さらには、たくさん仕上げようという気持ちが育ち、全体の作業の流れを見ながら班員に指示を与えるという態

度も見えてきた。具体的な指導項目、責任感とおもいやりの面におけるK男の変容は、一応の成果を認めることができた。しかし、班長のもう一つの役割であるリーダーシップの面を、今後の指導によって大きく伸ばしていきたい。

② 第三回校内職業実習（11月下旬～12月上旬・10日間・毎日6時間 業種別3グループ）

今回の校内職業実習は、年賀状印刷を通して、印刷作業の技能習得及び向上や流れ作業における態度の育成をねらいとしたものである。印刷作業は、「文選」「組版」「印刷」「解版」「返し」「包装」等の作業工程を繰り返すため、全体の流れを見通しながら作業に取り組むことが必要となる。我々は、印刷学習を初めて経験するK男の具体的な指導項目をやる気（自発性・意欲）と根気（集中・真剣）に定めて取り組んだ。

◎やる気の意識づけ

- ・比較的容易な作業工程から順次高度な作業工程を経験させる。
- ・作業終了の報告を必ずさせ、その都度、的確な評価を与える。



印刷機を操作するK男
「ほくにもできるぞ。」

◎根気の意識づけ

- ・作業環境を意図的に緊迫した雰囲気にし、刺激を与えるとともに、作業の重要性・確実性を強調する。
- ・作業の流れの中での自分の役割を、常に意識させる。
- ・休けい時は、できる限り休息をとらせることによって次の作業への気力補充とする。

このような指導の手だてを加えていったが、K男の10日間の取り組みから、次のような変容がうかがえた。

- 最終チェックを兼ねた「包装」を自分から進んで行うようになった。
- 印刷機の止めの感覚がわかり、自分にも「印刷」ができるという気持ちが大きく育ってきた。
- 自分の作業に一区切りつくまでは休けいをしないで取り組むようになった。
- 常に作業終了の報告ができ、次の指示を仰ぐようになった。
- 作業中の表情に真剣さが見えるようになった。

やる気・根気の面で以上のような変容をみたわけだが、この変容が生きた力としてどれだけ身につけているか、三学期の第四回校内職業実習（文集印刷）において確かめられることになる。

3 学校行事・学部行事における指導

高等部では、表現力や社会性を育成する領域として学校行事・学部行事を重視している。集団の中

で自分の位置するところを自覚し、自分の役割を果たすことが、自分をも含めたその集団に貢献することになり、自分を高め、集団をより発展させることになる。さらに、そのことがまわりの人たちからも認められる存在になり、自信へとつながる。K男にとって行事への積極的な参加や取り組みは、個人目標を達成するうえで重要な要素である。

(1) キャンプにおける指導(学部行事・7月・1泊2日 砂丘キャンプ場)

キャンプへの取り組みを通して、第一回校内職業実習でのK男の目標であった責任感・おもいやりの到達度をより高めながら、リーダーとしての行動力を育てることに重点をおいて指導した。5名ずつ5班の編成で、K男はその一つの班の班長として推薦され、素直に引き受けた。班員は自閉的傾向の強いM男(1年)、軽度ではあるが自閉的傾向の認められるN男(3年)、細かい作業を苦手とするY男(3年)、自己中心的な面のあるS子(2年)たちである。

準備や練習等の事前学習で、まず気づいたことは、K男が「班の仕事を自分一人だけでしようとする」という問題である。そこで、「自分の仕事を自発的に行い、みんなが協力できるように取り組める」を目標として、K男に班長は「班の仕事内容と段取りがわかり、その仕事を班員に指示をする」ことが大切であることを意識づけながら指導した。

◎指導の手だて

- ・最初は、何をどのように分担させるかを報告させる。
- ・考えや行動に詰まった時には、先生に尋ね指示を受けるようにさせる。
- ・班員一人ひとりの行動に目を向けさせる。
- ・準備や作業の速さ・正確さを他の班と比較させる。
- ・言動に対し、的確な評価をし、良い時には誉める。
- ・教師同士の意図的な会話をさりげなく聞かせる。
- ・誤りをすぐに指摘しないで、気づくように仕向ける。

このような指導をしていった結果、事前学習・本番を通してK男に次のような変容が見られた。

- 「〇〇君～して下さい」とか「みんなで～しましょう」といった言葉かけができるようになった。
- 作業を逃げようとするM男を引き止め、いっしょに作業をするようになってきた。
- 自分がしかけている仕事にもう一人手が要る時には、その「もう一人」を見つけて指示ができるようになった。
- 行動の一つ一つに積極性がでてきた。

このように、「自分の仕事を自発的に行い、みんなが協力してできるように取り組める」という目標は班長としての活動を通して、かなり達成されたと考えられる。過去に、リーダーとしての経験がほとんどなかったK男にとって、このキャンプ学習を通して、未知なことが多く、自分がどうすればよいか、大いにとまどったところではあるが、班長としてやりぬいたという満足感を

持ったようである。K男が新しい場面に向うとき、的確なやり方や要領などポイントにまず気づかせた上で取りまわせることが、非常に有効であると考ええる。

(2) 運動会における指導(学校行事・9月)

年間の行事の中で、K男が最も得意とし自信を持って参加し、積極的な取り組みが期待できる行事が運動会である。事実、演技練習や準備に積極的に取り組んでいた。我々も、今までのK男のいろいろな取り組みから、彼がかなり自信を回復したと判断したので、今まで学習してきたことの成果が、どう現れてくるか、問題点は何かを主に観察することにした。

前日までは、熱心な取り組みを続けていて、大きな問題点はなかった。ところが、K男が「運動会に出たくない」という理由で運動会当日に登校を渋ったのである。その理由は次のようなことであった。

- ① ピアニカ鼓隊の中太鼓担当に選ばれたが、いくら練習しても上手にできないので、本番で失敗そうである。(我々は、かなり上手にできていると判断していた。)
- ② 当日の放送係に選ばれていたが、自分の声を聞かれない。(練習はなかった。)
- ③ 大勢の人の前、特に同じ地区の人の前で演奏したり、放送するのが恥ずかしい。

特に、③の理由が最もウエイトを示めていたようである。K男は、本校と同じK地区に住んでいる。「恥ずかしい」という気持ちの中に、競技への自信はあるものの、中学校時代の自分のことを知っている人が見ていることへの気まづさや、入学前、人前で目立つような活動の経験がなかった劣等感が、心の底にあるようだった。

そこで、担任がK男の家へ行き次のような指導をした。

- これまでの集団活動の中でやりぬいていったいろいろなことに気づかせる。
- やればできるということ。
- 今までやってきた練習が全て無駄になるということ。
- 逃げるのは簡単だが、今逃げると、これから先大人になっても逃げることはできないということ。
- 逃げてばかりの自分を考えてみて、それで満足できるかということ。

K男は、約30分遅れて登校(半ば強制的)した。徒競走など各種目に出場し、それぞれ1～2位という成績を納めた。我々は、放送係としての仕事の回数は減らしたが、ピアニカ鼓隊には参加させた。K男は、その後作文に「とても恥ずかしかったです。でも、やってよかったです」と書いている。

K男の問題点として、「人前で自分を表現する」ということへの自信が、今だに高められていない面があることが分かった。将来、職場でまわりの人の中に自分から進んで入り気軽に話ができるということも就職の条件として必要である。さらに、K男の個人目標を達成するために、多くの人の前で自分を表現できるような自信や態度の育成に努めなければならない。

(3) 学習発表会における指導（学校行事・11月）

高等部は、学習発表会において、劇『ピーターパン』と朗読『職場実習体験記』を行うことになった。我々は、K男の目標を「多くの人の中で自分を表現する」とし、劇の練習を通して指導をした。

K男は小柄であり、身が軽いということ、そして、かなりの量のせりふを覚えるだけの能力があるということで、主役（ピーターパン）に抜てきされた。K男も快く引き受けたが、運動会の時のこともあり、我々には不安もあった。

（実態1）

- ・声が小さい
 - ・せりふを覚えていない。
- ↓
- <指導の手だて1>
- ← 家で練習して来るように指示する。



劇『ピーターパン』より

（実態2）

- ・「おーい」というせりふを大きな声で言えるようになる。
- ・休けい時間にシナリオを開いて練習するようになる。
- ・スキップができない。

- ↓
- <指導の手だて2>
- ← その都度、大きな声で言えた部分を誉める。休けい時を利用して、スキップの練習をさせる。

（実態3）

- ・徐々にせりふを覚え、大きな声が出るようになる。
- ・スキップができるようになる。

- ↓
- <指導の手だて3>
- ← スキップができるようになったことを、どの教師にも誉めてもらう。劇の中に後方転回（K男に可能）をする場面を設定する。

（実態4）

- ・劇練習の時間を楽しみにするようになる。
- ・タイミングよく後方転回ができるようになる。
- ・朗読も大きな声で言えるようになる。

学習発表会の当日も我々が心配するまでもなくK男は元気よく登校してきた。劇の本番においても、今までの練習の成果を十二分に発揮することができた。これは、運動会での経験がよい自

信となり、大勢の人の前で堂々とした演技につながったといえよう。さらに、今までできなかったスキップが練習してできるようになったこと、K男の得意とする後方転回が劇中にあったことも、大きな自信となり、「多くの人の前で自分を表現する。」ということができたのである。

4 考察とまとめ

我々は、K男の個人目標達成のため指導を、作業学習、校内職業実習、行事を中心に行ってきたわけだが、以上のようなK男の変容の結果から一応の成果をあげたと確信する。しかし、我々が期待するだけのことをK男が理解し、実践する能力を持っていたことと、我々がK男の特性を積極的に生かして、彼の自分自身に対する目を開かせようとした試みと重なった結果であると思う。

K男は、10月の下旬に6日間の職場実習を行った。K男の学校でのいろいろな活動を通して育んだ自信は、生きてだろうか。実習後の事業所の評価によると、出勤・退勤のあいさつができた。根気よく最後まで作業ができた。作業の早さが日に日に速くなった。作業終了の報告をし、次の指示を仰ぐことができた。職場の人と会話ができた。など、良い点が多かったが、敬語が使えなかった。返事はできるが声が小さい。などの問題点も指摘された。K男の反省文からみると、仕事に取り組む気持ちや事業所の人との交わりに自信がでてきているようである。このように、わずか6日間の職場実習においても、様々な事柄に対する積極性や、やり通したという満足感を持たせることができた。今後は、このことをより確実にするために、もっと長期の職場実習を経験させてみる必要があると考える。

最後に、K男のように、将来の社会参加の姿に職業的自立の可能性を大きくみることができる生徒に対する自信を高める指導は、単なる自信回復や自信向上を最終の目標に置くものではない。それは、高められた自信がその生徒の「生きて働く力」にならなければならないからである。社会人、職業人として自分なりの生きがいを持つこと、生きがいを持てるような指導につなげていくことが大切である。

個に応じた自立をより確かにする指導のあり方を常に考えながら、実践を繰り返す中で、「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」の姿を現実のものとするように努めたい。